



TITLE:

秦の閩中郡について

AUTHOR(S):

和田, 清

CITATION:

和田, 清. 秦の閩中郡について. 東洋史研究 1936, 1(5): 409-419

ISSUE DATE:

1936-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138708>

RIGHT:

東洋史研究

第一卷
第五號

昭和十一年六月發行

秦の閩中郡について

和田 清

一

秦の閩中郡のことは史記^{卷一}一四の東越列傳の劈頭に「閩越王無諸及越東海王搖者、其先皆越王句踐之後也、姓驍氏、秦已并天下、皆廢爲君長、以其地爲閩中郡、……漢五年(202 B.C.)、復立無諸爲閩越王、王閩中故地、都東冶」とあり、漢書^{卷九}五兩粵傳にもほぼ同様に見えてゐる。そしてその閩中郡の位置については、宋の裴駰の集解に「徐廣^(晋末宋初の人)曰、今建安侯官是」と見え、唐の司馬貞の索隱には「小顏^(顏師古)以爲即今之泉州建安也」とあり、張守節の正義には「今閩州、又改爲福也」とある。晋宋の建安郡^(實は當時は晋安郡)侯官縣も、唐の閩州・福州の治所も、俱に今の福建省閩侯縣(福州)の地である。顏師古の言ふ泉州建安はもとの建安郡の治所で、今の建甌(建寧)の地に當るが、何れにしても、閩江の流域地方である。さればこの後、晋書^{卷一}五地理志でも、舊唐書^{卷四}〇地理志でも、福建通志の類の如きも、閩中郡の位置については、凡て之に従つて、殆ど異辭はない。

けれども、秦郡配置の大勢から見ると、今姑く問題の閩中郡を除いて考ふれば、最東南の郡は會稽郡であつて今の江

蘇の吳縣(蘇州)に治し、その西隣の九江郡は今の安徽の壽縣に治し、更に西隣は長沙郡であつて今の湖南の長沙縣に治し、その南隣は南海郡であつて今の廣東の番禺縣(廣州)に治してゐる。さうしてこれらが乃ち閩中郡を取捲く隣郡なわけである。之を換言すれば、今の浙江は會稽郡の南隣であつて特別な郡はなく、今の江西は九江郡の屬地に過ぎず、未だ郡を置かれる程に開けてゐなかつた。蓋しこれらの地方は東南支那の山地であつて、未開の土民の據る所であつたから、その開發は極めて遅れてゐたのである。然るにこれらの諸省の地を隔て、遠く先方の福建にのみ、獨り閩中郡が置いてあつたとは果してどういふことか。福建こそは仙霞嶺山脈を隔てた特別の邊陲で、後代にもその開發は尤も遅く、漢が天下に一百餘郡を開いた時にも、安徽南部には丹陽(城宣)廬江(城舒)二郡を増し、江西には豫章(昌南)郡を置き、湖南の南方にも零陵(陵零)桂陽(縣郴)兩郡を増した頃に至つても、未だ福建には郡縣を見ず、福建内部に眞に郡縣が出来たのは、後漢末の建安中(196—220 A.D.)に先づ侯官(州福)建安(寧建)南平(平延)漢興(城浦)諸縣が置かれ、尋いで三國吳の時に及んで江南の開發が益々進み、その末葉孫休の時代(200 A.D.)に遂に建安郡(寧建)が設けられたのが、最初のこととされてゐる。
(市村博士「唐以前の福建及び臺灣に就いて」)。同じ支那の南方ではあるが、湖南・廣東が割合に交通が便利で、早くから開けてゐたのに反し、江西・福建は山路崎嶇として開發に遅れ、晋室の南渡の後にも、概して化外の蠻地を以つて目せられ、此の地方が眞に支那化したのは、隋唐を経て後、宋代の頃からだとは世に知られた事實である。然るに漢より以前既に秦の時に於いて、これら未開の數省を隔て、獨り福建にのみ閩中郡が置いてあつたとは、果してあり得ることであらうか。これは大に疑はしいことと言はなければならぬ。

勿論これを疑ぐつたのは私に始まらないで、古くは清初の陳芳績の歴代地理沿革表卷四にも、その事を論じて、晋書地理志が閩中郡を秦の郡中に數へたのは不都合だとなし、「按閩中在秦未見有縣、安得有郡、況本紀(史記秦紀)極言始皇好大喜功、豈遺開閩一段、疑晋志(晋書地理志)閩中乃榆中之訛也」と云つてゐる。併し前述の如く東越列傳には明瞭に「秦已

井天下、皆廢爲君長、以其地爲閩中郡」とあるのであるから、一概に閩中郡を無何有の郷とは考へられぬ。そこで思いつくのは、後代の閩の名は専ら福建の地を指すけれども、それは寧ろ後の轉訛で、本來の閩中はもつと中原の地方に近く今の浙江の方面にでもあつたのではなからうかといふ考へ方である。越の都の名を負ふ會稽郡が吳の故都に置かれた所から見ても、閩中郡もまた越の故地あたりにあつてよさうである。私がさう思ひついた所へ、偶々他の論據からさういふ考へを述べられたのが、民國の三國時代歴史地理の專攻家葉國慶氏であつて、氏は燕京學報第十五期（民國二十三年六月出版）に「古閩地攷」といふ一篇を寄せて、専らその旨を述べられた。氏の意見は頗る詳密なものであるが、今その要領だけを採ると、史記東越傳には閩越王が東冶に都すとあるが、漢書兩粵傳にはたゞ冶に都すとあり、それが正しいので、冶と東冶とは別地である。後漢書・三國志等の記載によつて考ふるに、冶は恐らく今の臨海（台州）の南を流るゝ靈江の流域に當り、東冶はその南甌江の注ぐ永嘉（温州）の附近でゝもあらう。何れにしても、冶が閩中の故地であつたことは確であるから、古の閩地が今の浙江若しくは浙閩境界の地方なることは疑なく、その漸く南に移つたのは、漢民族の發展につれて、次第にその屬地が開發せられたからである、といふのである。私は之を見て、これ正に我が言はんとする所を道破したものだと思ふ。けれども、その後更に考へて見ると、まだ腑に落ちない所がある。

二

それは先づ第一に冶と東冶との問題である。冶と東冶とが同一地であるか、別地であるかについては大分議論もあるが、私は葉氏が之を別地としたことに異論はない。たゞ冶が今の臨海附近なのに對して、東冶が永嘉方面といふのは果してどうであらうか。これについては恩師市村博士（東洋學報八、六一—八頁）に委しい論證があるから、詳細はそれに譲るが、要するに冶が臨海附近なのは正しいとして、東冶は永嘉の方面ではなく、確に今の福建閩侯（福州）の方面のやうである。さう

して史記に閩越王が東冶に都すとあるのが正しく、漢書に之を治と改めたのが誤なのである。事は小さな差別のやうであるが、それから起る形勢の見透しに大きな相違を生ずるのである。と云ふのは、漢の武帝は尤も功を喜び大を好み、父祖以來の積善に頼つて、國威を八方に輝かせ、凡そ秦の始皇の爲した所は、すべてその後を襲つて更に之を擴大した。例へば、嶺南の三郡を増して九郡となし、更に西南夷を定め、九原の故地を恢復して朔方・五原二郡とし、更に河西の四郡を拓き、また遼東を越えて朝鮮の四郡を設けたが如き、皆是れである。然るに東越閩越のみは之を平げると、「東越狹多阻、閩越悍數反覆」と云ひ、「詔軍吏、皆將其民徙江淮間、東越地遂虛」とあり、その地を空しうして、何等の設備をしなかつたといふ(史記東越傳 漢書兩粵傳)。漢が閩地を棄て、經營せず、閩中郡を復しなかつたのは、明かにそこが特別に邊鄙で遠くして制し難かつたからである。これが若し葉國慶氏の言ふやうな治(臨海)や東冶(永嘉)の地方なら、それは漢書卷二 八上 地理志にも見え、(實は地理志には治はあるが、別に東冶の名前はない、併しほゞ之に代るべきものに同浦がある)、漢が會稽郡の南境として保持してゐた所である。若し果して閩中の地が浙江にあつたとしたならば、それは漢の領域中に含まれてゐた所で、之を立派にその領土中に包有しながら、武帝が秦の閩中郡の故稱を復しない道理はない。乃ち漢が閩中郡を設けなかつたのは、閩地がその把握の外にあつたことの確證である。かう考へれば、古閩地はやはり浙江ではあり得ない。

況して史記卷一 漢書 卷九の南越傳によれば、閩越は嶺南に據つた南越の東隣であつて、南越の盛時には之に役屬せられ、時に或は南越と争つたといふ。即ち漢の武帝の建元六年(135 B.C.)には閩越が南越を侵し、南越がこれを漢に訴へたので、漢兵が閩越の境上に臨み、閩越は自らその王を殺して罪を謝したこともあり、その結果閩越王の弟餘善は東越王に封ぜられたのであるが、後二十餘年南越が罪を漢に獲て、漢兵の討伐を蒙るや、東越(即ち閩越)はまた漢の意を迎へ、兵を出して之に應じたのであつて、その事は史記東越列傳には「元鼎五年(112 B.C.)、南越反、東越王餘善上書、

請以卒八千人從樓船將軍(漢將楊僕)擊呂嘉(南越の相)等、兵至揭陽、以海風波爲辭、不行、持兩端、陰使南越、及漢破番禺不至」とある。揭陽は清の沈欽韓も言へるが如く、潮州であつて、今の廣東揭陽縣の附近である。さうして、右の文勢から見れば、この今日の福建廣東の境の邊が、當時もやはり東越南越の境上であつたやうである。その後、漢は南越を平げた勢に乗じて、また東越をも討平したので、その征戰の要地として、梅嶺・武林・白沙・若耶及び漢陽若しくは泉山等の地名が出て来るが、その地は何れも明瞭でなく、之によつて東越の本據が何處であつたかを決定することは困難である。併し以上によつても、東越即ち閩越が南越の東隣であつて、今の福建方面だつたことに疑はない。

但しこれは武帝の時代のことであるから、漢興つてより七八十年、秦の時よりは百年に近く、或はその時分の形勢ではあつても、秦が閩中郡を置いた頃の形勢ではなく、つまり秦の時には未だ北にゐた閩越が漢人の壓迫を受け、此の頃までに次第に南下して來たものとも考へられさうである。けれども、その決してさうでないことは、この方面の民族分布の大勢からも察知される。史記漢書の南越東越兩粵傳等によると、今の廣東の地方に南越があり、その西に連つて今の東京安南の方面に西甌若しくは駱越といふものが居り、恐らく今の廣西の方面に蒼梧の秦王といふものがゐた。南越の東には閩越一名東越があり、その東に連つて東甌がゐた。東甌のことは今まで略して來たが、史記東越列傳の劈頭には實は左の如くあり、

閩越王無諸及越東海王搖者、其先皆越王句踐之後也、姓驪氏、秦已并天下、皆廢爲君長、以其地爲閩中郡、及諸侯畔秦、無諸・搖率越、歸鄱陽令吳芮、所謂鄱君者也、從諸侯滅秦、當是之時、項籍主命弗王、以故不附楚、漢擊項籍、無諸・搖率越人佐漢、漢五年、復立無諸爲閩越王、王閩中故地、都東冶、孝惠三年、舉高帝時越功曰、閩君搖功多、其民便附、乃立搖爲東海王、都東甌、世俗號爲東甌王。

その東甌が今の甌江の注ぐ永寧即ち永嘉(溫州)附近なることは既に定説があつて、紛れもないやうである。尤も東甌はそ

の後閩越と争ひ、漢に救はれてその國を移されたので、東越列傳の續きには、武帝の建元三年(138 B.C.)「東甌請舉國徙中國、乃悉舉衆來處江淮之間」とあるが、元來越種族の一派として東甌に據つてゐたことは疑ない。

考へて見るに、これらの諸族は皆越の別種と稱せられ、閩越・東越・南越・駱越などと呼ばれてゐるが、その名稱の起源から言へば、越といふのは恐らく今の浙江の北部に據つた越王句踐の一族から起つたものに相違ない。蓋しこれらの名稱は最初は必ず特殊の小區域から生じ、やがて次第に廣範圍に及ぶのが常であるから、春秋の末に最初に支那人に知られた越の名が、後に次第にその類族に推し及ぼされたのであらう。その證據にはこれらの諸族は元來は各々その獨自の稱呼を持つてゐたらしいことである。例へば浙江北部の越に對して、浙江南部のものは甌と云ひ、福建のものは閩と云ひ、安南のものは駱と云つた。獨り廣東の南越には固有の稱呼がないやうであるが、私は密に陸梁といふのがそれではないかと疑つてゐる。蓋し史記^{卷一}の南越尉佗列傳によると、南越のことは最初に、「秦時、已并天下、略定揚越、置桂林・南海・象郡、以謫徙民、與越雜處」とあるけれども、更に根本の同書^{卷六}の秦始皇本紀三十三年の條には、たゞ「發諸嘗逋亡人贅壻賈人、略取陸梁地、爲桂林・象郡・南海、以適遣戍」とのみ見え、陸梁とあつて、揚越とも越とも云つてゐない。揚越の名は古く史記^{卷四}楚世家に、周の夷王(894—879 B.C.)の頃楚子熊渠が大に地を拓いたことを説いて「熊渠甚得江漢間民和、乃興兵伐庸楊粵、至于鄂」とあり、始めて楊粵と見えるけれども、その楊粵は果して一地なのか、それとも楊と粵との二地なのかも詳でなく、固よりその指す所も明かでない。何れにしても、それが遠い嶺南の地方でないことだけは確である。また戰國策^{秦策三}下にも吳起が楚の悼王に用ひられ、楚のために揚越を攻めた由が見えるが史記^{卷六}の吳起傳にはその揚越を百越に作つてゐる。史記は勿論、戰國策も羅根澤氏等(古史辨第四冊所收「戰國策作於荆通考補證」)の言ふ通り、恐らく漢代の作であらうから、假りにこれらの語はあつても、それで嶺南を揚越といふことの古い證據にはならない。揚越の揚は顧頡剛氏(史學年報一ノ五)の言ふやうにたゞ發聲の語でなければ、揚越とは、張晏や張守節の注にある如

く、揚州の越といふ程のことで、本來は越の別名に過ぎなかつたのを、後には江西の越をいふとか、廣東の越をいふとかいつて、次第に轉訛されたのであらう。

されば揚越は決して南越の固有名ではない。之に反して陸梁については、司馬貞の索隱に「南方之人、其性陸梁、故曰陸梁」と見え、張守節の正義には「嶺南之人多處山陸、其性强梁、故曰陸梁」とあるが、その牽強附會の誤釋であることは言ふまでもない。私は之を南越の土稱と見るに非ずんば、他に解釋のしやうはないと思ふ。その土名は陸梁であつたが、南方の中心にあつたから、之を南越と呼び習ひ、後にはその土名が忘れられたのであらう。さうして南越の名が漸く高くなるや、その東方に當る所から、閩越を後には東越とも云ひ、西方の甌賂を一に西甌とも賂越とも云つた。かくして越の名は次第に南方に移り、後世には専ら安南の國號を大越とか越南とか云ふやうにもなつたのである。

さて以上の考察にして若し大過がないとすれば、南支那の沿海、江浙閩廣の地方には、古くから吳・越・甌・閩・陸梁・甌賂等の種族があつて、各々その地に割據してゐたのである。更に以前の狀態は別として、少くとも戰國・秦・漢の際に於いては、この形勢に大した變化は無かつたであらう。その中、越が浙江の北部にあつて、甌がその南部、陸梁が今の廣東地方に當ることはほぼ確であるから、その間に挟まれた閩が今の福建地方に當ることも、之を疑ふことは出来ぬ。葉國慶氏は冶を今の靈江の方面に當て、之を閩越の中心にしたが、それでは閩越が東甌よりも北方にあることになつて、到底困難を免れまい。閩越の中心は東冶であつて、冶はこれとは關係がない。かう考へて來ると、閩越は福建も恐らくその中心地方にゐたのであつて、之を今の閩江の流域に當てた古來の説は誤らないのである。

三

それでは秦はどうして斯様な所へ閩中郡を置くことが出来たか。それを決するためには、秦が果して何時如何にして

閩中郡を設けたかを考へねばならぬが、私はそれを、秦の始皇の三十三年(214 B.C.)陸梁の地を平げて、桂林・象郡・南海三郡を置いた餘威に乗じて設けたものと信じてゐる。南越・閩越は俱に南支那の瀕海に隣接した類族であつて、後の事ではあるが、南越の盛時には閩越は之に役屬したこともある。その南越が秦軍に討平せられた時、閩越が之を聞いて震懼しない筈はない。震懼した閩越は當然秦の軍前に投降したのであらう。そこで秦は之を撫綏して閩中郡を置いた。それは丁度漢の武帝の元朔元年(128 B.C.)今の南滿・北鮮の界上から、東夷葦君南閩等が大舉して投降したので、之を撫して蒼海郡を設けたのと同様の事情であらう。蒼海郡は設けたが、當時の漢の勢力は未だ實際にこの邊陲にまで及んでゐなかつたから、到底その維持が出来ず、創設僅か年餘にしてまた之を廢棄して了つた。秦の閩中郡も恐らく相似た運命に終つたらうことは、閩越經略のことの一切史に見えないことゝ、及び南海郡等には郡尉も縣令も種々その名が見えてゐるに係らず、閩中郡には絶えてさういふ職官の名の見えないことから推察される。

殊に秦が閩越經略に遑の無かつたことを確證するものは、その南越經略の不手際である。蓋し南越陸梁の地は始皇の三十三年に一度討平せられたけれども、數年ならずしてまた背叛し、秦はその彈壓に日も維れ足らなかつたのである。その事は史記漢書の本傳には見えないが、史記^{卷一}主父偃傳、漢書^{卷六}上嚴助傳、同^{卷六}下嚴安傳等に見え、殊に漢書の嚴助傳には特に淮南王安の上書として、左の如く見えてゐる。

臣聞長老言、秦之時、嘗使尉屠睢擊越、又使監祿鑿渠通道、越人逃入深山林叢、不可得攻、留軍屯守空地、曠日持久、士卒勞倦、越迺出擊之、秦兵大破、迺發適戍以備之、當此之時、外內騷動、百姓靡敝、行者不還、往者莫反、皆不聊生、亡逃相從、羣爲盜賊、於是山東之難始興。

但しこれだけでは始皇の第一回の征伐が失敗したものゝやうにも取れるし、或はまた撃たれたものが南越ではなくて、閩越でもあるかとも取れるが、そのさうでないことは、同じ事を叙した淮南子^{卷十}八 人間訓の文から明瞭である。曰く、

秦皇挾錄圖、見其傳曰、亡秦者胡也、因發卒五十萬、使蒙公・楊翁子、將築修城、西屬流沙、北擊遼水、東結朝鮮、中國內郡輓車而餉之。又利越之犀角象齒翡翠珠璣、乃使尉屠睢、發卒五十萬爲五軍、一軍塞鐔城之嶺、一軍守九疑之塞、一軍處番禺之都、一軍守南野之界、一軍結餘干之水、三年不解甲弛弩、使監祿二字衍？（無以）轉餉、又以卒鑿渠、而通糧道、以與越人戰、殺西嘔君譯吁宋、而越人皆入叢薄中、與禽獸處、莫肯爲秦虜、相置桀驁以爲將、而夜攻秦人大破之、殺尉屠睢、伏尸流血數十萬、乃發適戍以備之。當此之時、男子不得脩農畝、婦人不得剡麻考繆、羸弱服格於道、大夫箕會於衢、病者不得養、死者不得葬、於是陳勝起於大澤、奮臂大呼、天下席卷、而至於戲、劉項興義兵、隨而定、若折槁振落、遂失天下、……

鐔城之嶺、九疑之塞は、恐らく注者の言ふが如く、五嶺の險であらうが、番禺之都は南越の中心であるから、南野之界は或はその南界で、餘干は今の江西の餘干に近く、これで見れば、南越の全土を彈壓して、更に閩越にも備へてゐたやうである。これが陳吳の舉兵より三年前だとすれば、必ず始皇の三十五六年のことで、初次の討伐の後僅に二三年を隔つるのみである。

史記の主父偃傳に引いた嚴安の上書には、この事を謂つて「又使尉佗・屠睢、將樓船之士、南攻百越、使監祿鑿渠運糧、深入越、越人遁逃、曠日持久、糧食絕乏、越人擊之、秦兵大敗、秦乃使尉佗將卒以戍越、云々」とあるけれども、南越王趙佗は秦の亡びた頃未だ纔に南海郡龍川縣の令だつたのであつて、當時の南海の尉任囂の臨終の顧命を受けて、始めて南海の尉の事を行つたのであるから、最初から重要人物だつた筈もなく、勿論尉佗と呼ばれる筈がない。この點は嚴安上書の文の誤である。思ふに尉屠睢・監祿等の尉・監は必ず南海郡の職官だつたのであらうから、尉屠睢が殺された後に、尉任囂が繼ぎ、更に尉趙佗に及んで南越の王業を成したのである。これは南越史上の最大事件でなければならぬ。然るに此の史料を知りながら、之を南越傳に收めなかつたのは、反覆を避けるための一法でもあらうが、或る意

味では司馬遷・班固の失態であつて、そのために後人は多く欺かれてゐる。例へば彼の秦の嶺南經略(La première conquête chinoise des pays annamites, (III^e siècle avant notre ère.) BEFEO, XXIII, 1923.)を研究した佛人 Leonard Auroousseau の如きも、この彈壓を初次の征伐と誤認した、め大なる錯誤に陥つてゐるのである。

さて本論に歸り、南越の事情が當時斯くの如くであつたとすれば、その間に閩中の經營の行はれなかつたのは當然である。尤も閩中郡の開設が始皇の三十三年だといふのは、私の推測であつて、事實は必ずしもさうでなかつたかも知れぬ。現に王國維氏の秦郡考(觀堂集 林十二)には、之を二十五年のこととし、「東越列傳云、閩越王無諸及越東海王搖者、皆越王句踐之後也、秦已并天下、皆廢爲君長、以其地爲閩中郡、而始皇本紀、繫降越君於二十五年、則閩中郡之置、亦當在是年、本紀但書降越君置會稽郡、文有所略也」と云つてある。蓋し二十五年はその前年までに、數年かゝつて楚を伐ちその將を殺し王を虜にして、漸く江北を平げた秦將王翦が、この春江を渡つて南方を平げた年で、史記六卷秦始皇本紀の本文には「王翦遂定荊(楚即也)江南地、降越君、置會稽郡」と見える。但しその下文には直に續けて「五月天下大酺」とあり、その江南經略が是年四月以前のことだつたのはほど推測出来る。考へて見るに、秦は大國楚を降すのが目的で、師を暴すこと數年、漸く楚を併せ、勢に乗じて江南を定めた。その勞憊の師が最後の數月で、果して遠く南方まで行つて、閩越をまで歸降せしむることが出来たであらうか。否却つて「降越君置會稽郡」の一句は殆ど會稽(蘇州)地方の越君だけを降したことを意味するものゝやうである。

なほ考へて見るに、春秋の末吳越の興亡の後、楚がまた興つて越を滅ぼすや、戰國の中葉、楚の威王は越王無彊を殺して、盡く吳の故地を收め、浙江以東を棄てたのであつて、史記一卷四越王句踐世家の末には左の如くある。

楚威王興兵而伐之、大敗越、殺王無彊、盡取故吳地、至浙江、……而越以此散、諸族子爭立、或爲王、或爲君、濱於江南海上、服朝於楚。

戰國末の兩浙の形勢は正に斯くの如くであつたのであつて、越の王都會稽の名が呉に移つて郡名となつたのも、またこの故に外ならぬ。然るに秦王の威名が獨り此の方面から遠く閩越にまで轟くことが出来たらうか。假りにさういふ事があつたとしたら、斯くして閩中郡を開いたといふことは誠に破天荒の快事で、必ず史上に特筆大書されなければならぬ。なほ一步を譲つて、それは史文に略されたとしても、始皇の二十五年、未だ天下一統の以前から秦が閩中郡を置いて、その後十餘年を維持したとしたら、その間には閩中郡の經營施設も相當に行はなければならぬまい。而もさういふ證據は少しもないばかりでなく、却つて東越列傳によると、漢の太尉田蚡の語として、閩越の取るべからざるを論じ、その地は「自秦時、棄弗屬」とあり、之を反駁した中大夫莊(嚴)助の言にも、その事實は認めてゐるではないか。

私はあらゆる點から見て、秦の閩中郡は二十五年に楚を滅ぼした勢に乘じ、北方から設けられたものではなく、三十三年に南越を平げた餘勢によつて、一時名目的に置かれたものゝみと考へざるを得ない。清の王鳴盛は地理の考究に於いては最も力を致したと自ら言つてゐるが、その名著十七史商榷^{卷二}の中に、閩中郡のことを論じて、「案地理志^(漢書)所載秦三十六郡無閩中郡、蓋此郡之置、已在始皇晚年、且雖屬秦、而無諸與搖、君其地如故、屬秦未久、旋率兵從諸侯滅秦矣、故不入三十六郡之數」と云つたのは簡單ながらよく正鵠を失はぬものと言はなければならぬ。王國維氏の秦郡考は、専ら根本史料の史記の本文によつて秦郡の紛糾を極め、從來の紛々たる秦郡說に止めを刺したかの觀があるが、その中明白に楚世家にも見え、諸學者に相當議論のある楚郡のことを脱したりなどして、必ずしも萬全なものではない。されば徒にその權威に懼れて、閩中郡三十三年開置說を疑ふには及ばぬことである。

(昭和十一年五月八日稿)